

ブリーダー訪問

第10回 奈良県大和郡山 中野養鯉場

今回は、日本有数の金魚産地でもある奈良県・大和郡山市で、金魚の新品種作出に情熱を注いでいる、中野養鯉場をご紹介します。

自然の恵みに感謝しながら、 新品種の作出に情熱を注ぐ——中野養鯉場

レポート／大野 成実



とても来年80歳には見えない、若々しい中野さん

●歴史は古く

お盆も過ぎ、暦の上では秋なのに、まだまだ残暑厳しい8月後半、のどかな田園地帯の中にある中野養鯉場を訪れました。陽射しは眩しいものの、田んぼを吹き抜ける風はさわやかで、心地よく感じられました。

大和郡山は江戸時代より、武士の副業として金魚養殖が盛んに行われ、地場産業として発展してきました。「大和郡山といえば金魚」というくらい切っても切れないものとなっています。確かに大和郡山市内を移動していると、あちこちに〇〇養魚場と書かれたのぼりや看板、金魚養殖用の池をたくさん見ることができます。

中野養鯉場の主、中野重治さんは昭和2年2月生まれの79歳。しかし、そのお年を感じさせないほど、とてもお元気でお若く見え



かかしが見張っている大きな泥池



養魚場の店舗外観全景

「施心」我が身に蛙(人に施せば自分に返ってくる)が、中野さんの座右の名



鯉と金魚が混泳している所もあるタタキ池

ます。中野さんは4代目で、養魚場としては明治時代からの歴史を持ち、第二次大戦中は食用の黒鯉養殖、戦後20年ほどは「中野の紅鯉」(体全部、ヒレもすべて紅一色のもの)で名を馳せていました。現在では金魚養殖が9割以上を占め、錦鯉も少し養殖しているということです。

●大和郡山という地を生きか

中野さんの金魚に対する基本的な考え方は、大和郡山という土地に合い、200年以上になる地場産業としての金魚養殖文化を守っていくということです。先陣の努力によって、大和郡山が金魚養殖の産地として有名になったのだから、その火を消してはならない、引き継いで後世に残していかなければならない、と強く思われています。



外看板には、目立つ金魚が描かれている。



魚を傷つけないよう、ネットを使った出荷場



今年産まれた七夕金魚たち



将来有望な三つ尾の黄金錦



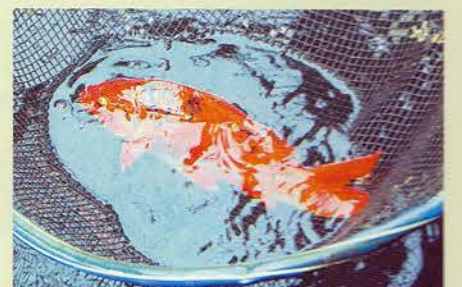
5年前の黄金錦



赤が錦鯉のような深い紅色をしている金魚



中野さんが目指している白、赤、黒(墨)の三色の金魚



中野養鯉場の看板鯉、紅鯉

しかしながら、金魚を取り巻く環境は年々厳しくなってきたり、中野さんは、今までのようなどこにでもいるような金魚では、大和郡山の金魚は廃れてしまうのではないかと、という危惧も抱いておられ、この大和郡山の土地に合い、しかも量産がきき、丈夫で美しく、特色ある金魚を作ること、これからの金魚養殖の未来を見つけようと努力されています。

大和郡山で一番有名な金魚という、よく金魚すくいで見られる小赤ということになります。赤一色のシンプルな金魚ですが、これではあまりにもシンプルすぎて楽しいと思えないのではないかと、カラフルな金魚なら見てもきれいで楽しいし、すくった後も飼ってみようかなという気持ちになるのではないかと、ということで、色彩のバリエーションが豊富で、しかも丈夫な「七夕金魚」を作られたそうです。

その他にも平成大和、シルク桜、スケルトン、五月三色、黄金錦、姫みやびなどなどたくさんの新しい金魚を作り出されています。中でもドイツ鯉との掛け合わせで誕生した黄金錦は、顔や金色の体色は鯉なのですが、髭がない

ので分類上は金魚になるという、不思議な金魚です。この金魚の誕生には、様々な偶然が重なっています。養魚場観察に訪れた子供たちの「どうして金魚は金魚というのに、金色ではないの?」という何気ない質問に「じゃあ、次に君たちが来るときには、金色の金魚を作っておくからね」と答えたことが、黄金錦に取り組みきっかけになりました。金魚にドイツ鯉の金色を掛けてやれば、金色の金魚が作れるのではないかと考え、金魚と鯉の掛け合わせに取り組まれたそうです。ところが、学説では鯉と金魚の掛け合わせは成立しないとされており、なぜ中野さんのところで掛け合わせが成功したかは謎なのですが、中野さん曰く、自然の為せる業、突然変異の不思議ではないかと、とのことでした。

突然変異は長い歴史の中、色々な生物を生み出す元です。ですから自然の中ではそんな突然変異は当たり前のことで、その変異にいち早く気づき、取り出して育てて繁殖させていくことで、固定化されると中野さんはおっしゃっていました。

●自然と共に

鯉とのかけ合わせにおいて、自然の素晴らしさ、不思議さを実感された中野さんは、自然と共存していくことが、人間にも金魚にも必要不可欠なこととおっしゃいます。

たとえば、科学の力でどんどん新薬が開発され、ちょっとした病気はすぐに治せるようになりましたが、その反面、本来持っている免疫力は低下しているように思われます。金魚の世界になぞらえると、病気になったから薬を用いてその場はすぐに治るけれど、全体的な大きな流れから言うと、体の根本自体が弱くなってきてしまい、すぐ死んでしまう、弱い金魚が多くなってしまったのではないかと、このことです。

私たちは自然によって生かされている、それは金魚も同じことで、自然と共に生きていくことで、充分免疫力を持つ丈夫な体を持つことができるのではないかと、信念を持って、自然に近い環境で飼育に励まれている中野さんの姿に、ちょっとした感動を覚えました。

Kingyo Do